

表2

	縮尺	桁行	梁間	柱間 左から1	2	3	4	5	6(中央)	7	8	9	10	11	高さ	屋根勾配1層目	2層目	大棟 長さ	軒の 出1層目	2層目	軒高1 層目	2層目	注)	
	現大仏殿	188.1	166.6		22.5	28.4	28.4	29.4	28.4	28.4	22.5		153.1	19°	35°	57.4	22.3	22.3	46.7	90.4	図7			
(一)	大仏殿内建地割板図	1/20	283.8	166.4	23.4	23.4	25.2	27.0	29.2	27.0	25.2	23.4	23.4	170	15°	32°	144	28	28	57	103	図2		
(二)	木子文庫堀内家文書 木001 2 02		284.2	166.6	22.6	25.4	28.3	28.5	29.4	28.5	25.4	22.6	22.6											
(三)	木子文庫堀内家文書 木001 2 11	1/100	(294.6)		(23.7)	(24.8)	(26.8)	(28.4)	(29.4)	(28.4)	(29.4)	(26.8)	(24.8)	(23.7)	(148.8)	27°	29°	(146.0)	(26.1)	(25.5)	(51.5)	(95.8)	図3	
(四)	木子文庫堀内家文書 木002 1 02	1/40	294.5	180.5	24.2	25.1	26.6	27.1	28.5	28.5	27.1	26.6	25.1	24.2	159.7	23°	35°	140.5	24.1	25.4	53.3	98.7	図4	
(五)	大仏堂貳百分一之図	1/200	284.3	166.6	22.6	25.4	28.3	28.5	29.5	28.5	25.4	22.6	22.6	143.2	14°	33°	74.2	27.1	29.2	48.7	92.2	図5		
(六)	文化九年複製図/ 方広寺大仏殿設計図	1/100	(301.0)		(25.9)	(26.8)	(27.6)	(27.9)	(29.4)	(27.9)	(27.6)	(26.8)	(25.9)	(196.9)	26°	40°	(140.1)	(31.7)	(30.7)	(59.1)	(109.9)	図6、中央間 29.4尺のとき		
(六)	同		(294.5)		(25.3)	(26.2)	(27.0)	(27.0)	(27.3)	(28.8)	(27.3)	(27.0)	(26.2)	(25.3)	(192.6)			(137.1)	(31.0)	(30.0)	(57.8)	(107.5)	桁行 29.4 5尺 のとき	
(六)	同		(283.8)		(24.4)	(25.3)	(26.0)	(26.0)	(27.7)	(26.3)	(27.7)	(26.0)	(25.3)	(24.4)	(185.7)			(132.1)	(29.9)	(28.9)	(55.7)	(103.6)	桁行 28.3 8尺 のとき	
	京大仏 愚子見記		294.5	180.5	24.5	25.5	26.5	27.5	28.5	29.5	28.5	26.5	25.5	24.5	160.0			136.5			53.5	95.8		
	方広寺大仏殿惣指図		294.5	180.5	23.7	25.6	27.2	27.8	28.3	29.3	27.8	27.2	25.6	23.7										
	北京大仏殿之図 匠明		294.5	180.5	24.5	25.5	26.5	27.5	28.5	29.5	28.5	26.5	25.5	24.5	160*	26°	32°		27.0	27.0			*大地より棟 までの高さ	
	洛陽大仏殿	1/200	295.2	181.3	25.4	25.4	26.5	27.1	28.8	28.8	27.1	26.5	25.4	25.4	172.4	23°	33°	120.8	25.7	26.3	54.4	104.6	図8	
⑤	方広寺大仏殿…/慶長 度方広寺大仏殿実測図	1/200	306.5	193.1	27.1	27.1	29.8	28.4	29.0	29.0	27.4	28.4	27.1	27.1	167.7	22°	32°	124.1	29.2	30.9	49.6	95.6	図9	
	方広寺大仏殿	1/200	306.5	193.1	26.9	26.9	27.7	28.5	29.3	29.3	27.1	27.7	26.9	29.9	167.9	23°	33°	123.1	26.6	31.4	51.8	93.9	図10	
⑦	京都大仏殿之図	1/200	306.5	193.1	27.1	27.1	27.9	27.9	28.8	28.8	27.9	27.9	27.1	27.1	169.3	22°	32°	119.2	28.9	31.0	51.3	97.0	図11	

比較にあたって、各部の寸法は建物の原寸で表記した。なお、比較のため、間で明記されているものは1間=6.5尺として計算し、数値の単位は尺とした。

寸法が史料に明記されているものに関しては太字にしている。桁行・梁間寸法、柱間寸法ともに記述が無いものに関してはその中央間を仮に2丈9尺4寸とし、中央間以外の柱間は図面から算出し、括弧つきで示してある。

各柱間寸法はないが、桁行・梁間寸法が明記されているものは各柱間の幅の比から寸法を割り付けた。

柱間寸法はすべて芯々寸法であり大仏殿内建地割板図に関しては実測値と縮尺から割り出した実寸を記した。

高さについては記述されているもの以外は基壇上から棟瓦上端までの数値を取った。

屋根勾配に関してはすべて度で表記した。

軒の出は一番外側の柱芯から側面の鼻隠板までとした。

軒高は基壇上から鼻隠板までとした。

に閉じ、側面の鼻隠板が描かれていないものは正面の鼻隠板までの寸法を取っている。

六、比較・考察

大仏殿内建地割板図は桁行二八三・八尺、梁間一六六・四尺であり、方広寺大仏殿の三種類の寸法とは異なる。また桁行、梁間は創建東大寺大仏殿の規模と一致する。柱間中央、二九・二尺は天平創建時、現大仏殿の二九・四尺とほぼ一致し、また中央七間分の合計値一八七・六尺は現大仏殿の一八八・一尺に近似する。しかし柱間それぞれに関しては旧来の礎石位置を考慮した柱割とはいえず、また方広寺大仏殿の各図面や(六)文化九年複製図/方広寺大仏殿設計図の柱割とも異なる独自の数値をとっている。軒高は一層目、二層目それぞれ現状より一〇尺ずつ高くなっていて、基壇上から棟瓦上部までの高さは約二〇尺高い一七〇尺となっている。しかし屋根勾配は現大仏殿に近い。軒は一層目・二層目ともに約四尺深い。

大仏殿の工事が本格的に始まってから後に、全く独自の柱間や高さを持つ図面を、幅六m近くもある画面に大々的に描くとは考えにくい。立柱が行われたのは元禄一〇年(一六九七)であり、この後に高さを二〇尺近くも変更するのは難しいだろう。また、元禄八年(一六九五)の年紀がある(二)木子文庫堀内家文書 木001・2・02の柱間は現大仏殿、天平創建の大仏殿と同じであり、旧来の礎石位置を考慮した計画である。これ以降に礎石位置を踏まえていない独自の柱割をもつ新たな計画が提案されたとは考えにくい。よって大仏殿内建地割板図は少なくとも元禄八年(一六九五)以前の計画図であるといえる。公慶が勸進を願い出たのが貞享元年(一六八四)であり、これより先にこのように大規模で密度の高い図面を独自に

作成したとは考えにくい。よって板図は貞享元年(一六八四)から元禄八年(一六九五)の一一年の間に描かれたといえることができる。また、この一一年の間において大仏殿再建計画図に関する記述は前述の元禄元年十二月九日中井主水が指図を完成させ寺から祝儀の項以外は見当たらず、よって大仏殿内建地割板図は元禄元年、中井主水による作成と考えてよいだろう。

この図に描かれている唐破風や、組物、装飾などの計画は(7)の諸図面を見ると分かるように、方広寺大仏殿の影響を受けたようである。基本計画は(二)(三)(四)木子文庫堀内家文書をはじめ、(五)大仏堂二百分一之図など一連の東大寺大仏殿再建計画全般において引き続き反映され、途中一一間から七間に縮小されるという大きな変更を経て、宝永五年の東大寺大仏殿完成に至ったと考えられる。

大仏殿内建地割板図と細部に至るまでの表現がよく似ている(四)木子文庫堀内家文書 木002・1・02であるが、板図に比べて高さは一〇尺低い約一六丈、大棟の長さは約四尺短い一四〇・五尺であり、上層の屋根勾配は近く、下層(裳腰)の屋根勾配はきつくなっている。軒の出は一〜二尺深く、軒高は三〜四尺低い。この図の縮尺が一/四〇であり、一尺の違いは図において約七・五cmとなることを考慮に入れると、(四)木子文庫堀内家文書 木002・1・02は大仏殿内建地割板図とは異なったプロポーションで描かれたといえる。

堀内家が中井家の下で棟梁を勤めていたこと(注18参照)、また架構まで考慮されていることを考え合わせると、(四)木子文庫堀内家文書 木002・1・02は平井氏が指摘しているが、方広寺大仏

殿を参考に、東大寺大仏殿再建のための雛形として描かれたと考え
るのが妥当であろう。

(三) 木子文庫堀内家文書 木001・2・11 は多少簡略に描
かれた図面であるが、高さは現大仏殿とほぼ同じ高さの約一五〇尺
で、方杖が採用され架構の考慮がされている。(五) 大仏堂二百分一
之図は柱間が旧礎石の位置と一致し、更に建地割図においては七間
縮小案が提示されていて高さも一四三尺と低く、現大仏殿と似た印
象を持つ。これらは大仏殿再建計画がある程度進んだ段階の図面で
あろう。

『東大寺金堂(大仏殿)修理工事報告書』において大仏殿内建地割
板図の複製とされる一方で、『日本寺院史の研究 中世・近世編』で
は方広寺の図面として扱われている(六) 文化九年複製図/方広寺
大仏殿であるが、板図とは柱間が異なり、また高さが一五尺以上高
く、軒の出も三尺近く深い。この図の縮尺が一/一〇〇であること
を考えると大きな差ではないかもしれないが、屋根勾配はかなりき
つく、さらに細部を見比べると板図を複製したとは言い難い。また
現段階では東大寺の図面であるのか方広寺の図面であるのかはつき
りしない。したがって(六) 文化九年複製図/方広寺大仏殿の性格
については再考する必要があるだろう。

その他、方広寺大仏殿の図面に関する個別の考察はここでは本題
ではなく、種々の研究もされているので省略する。

七、結論

本稿では東大寺大仏殿内東壁に掲げてある板図について、現大仏

殿をはじめとする東大寺の史料、方広寺大仏殿の史料と比較し、ま
た再建経過と照らし合わせることによってその史的位置付けを考察
した。製作の由来や伝来の経緯も今のところ明らかではないが、大
仏殿内建地割板図は従来言われていたように、『東大寺年中行事
記』に記述されている元禄元年、中井主水による指図である可能性
が非常に高くなった。

東大寺大仏殿が焼失してから一〇〇年以上経過したのち、公慶は
勸進を願い出た。雨露にさらされる東大寺大仏像を見て勸進を志し
たという公慶の、創建・鎌倉期と同規模の大仏殿を再建しようとい
う思いは並々ならぬものであったと想像できる。また図に描かれて
いる唐破風や、組物、装飾などの計画は方広寺大仏殿から影響を受
けたものであり、途中一一間から七間に縮小されるという大きな変
更を経てなお、板図における基本計画は後の東大寺大仏殿再建計
画全般において強く反映され、宝永五年の東大寺大仏殿完成に至っ
た。大仏殿内建地割板図は方広寺大仏殿の二度の建設と、修理を通
じて発展した「大仏殿」建築の集大成ともいえる壮大でかつ壮麗な
計画図であるといえよう。

- (1) 本稿一、東大寺大仏殿内建地割板図(「東大寺のすべて」展における図面解説文)
- (2) 天沼俊一『日本建築史要』飛鳥園、一九三二年改訂
- (3) 山本栄吾「東大寺大仏殿の規模」(『南都仏教』第二号、南都仏教研究会、一九五五年)
- (4) 『奈良六大寺大観 第九卷 東大寺一』岩波書店、一九七〇年
- (5) 『国宝東大寺金堂(大仏殿) 修理工事報告書』奈良県文化財保存事務所、一九八〇年
- (6) 平井聖「東大寺大仏殿の宝永度造営について」(川上貢編『近世建築の生産組織と技術』中央公論美術出版、一九八四年)
- (7) 現在の東大寺大仏殿の鴟尾は明治修理の際に取り付けられたものである(『東大寺金堂(大仏殿) 修理工事報告書』)。
- (8) 太田博太郎監修・内藤昌校注『注釈愚子見記』井上書院、一九八八年、三 四三頁。『愚子見記』の原文を読み下したものを、以下同じ。
- (9) 『注釈愚子見記』三 四四頁
- (10) 平岡定海『日本寺院史の研究 中世・近世編』吉川弘文館、一九八八年
- (11) 『注釈愚子見記』四 五一〜五五頁
- (12) 伊藤要太郎編『匠明』鹿島研究所出版会、一九七一年
- (13) 国立歴史民俗博物館編集・発行『古図に見る日本の建築』、一九八九年
- (14) 日本建築学会編『日本建築史圖集』彰国社、一九七二年、第九版
- (15) 谷直樹編『大工頭中井家建築指図集 中井家所蔵本』思文閣出版、二〇〇三年
- (16) 内藤昌編・著『愚子見記の研究』井上書院、一九八八年
- (17) 内藤昌・中村利則「ミヤコの変貌 聚楽第と大仏殿」(『近世風俗図譜 第九卷 祭礼(二)』小学館、一九八二年)
- (18) 木子文庫堀内家文書は、法隆寺大工の出身で幕府の京大工頭中井氏のもと、棟梁を務めていた堀内家に伝わった史料である。東大寺大仏殿の宝永度造営の棟梁を務めたのは堀内市郎右衛門正利であった。これに関しては注6平井論文に詳しい。
- (19) 『東京都立中央図書館蔵木子文庫目録』東京都立中央図書館、一九九五年
- (20) 伊藤要太郎『匠明五巻考』鹿島研究所出版会、一九七一年

付記

本稿第一項は黒田、それ以外は石田の執筆である。

(いしだ りえ 神戸大学大学院)
(くろだ りゅうじ 神戸大学助教授)